

農耕儀礼と動物の血(下) : 『播磨風土記』の記述とその引用をめぐって

著者	長田 俊樹
雑誌名	日本研究 : 国際日本文化研究センター紀要
巻	21
ページ	65-94
発行年	2000-03-30
その他の言語のタイトル	Agricultural Rites and Animal Sacrifice : Notes on the Description and Citation of HARIMAKOKUHUDOKI (2)
URL	http://doi.org/10.15055/00000713

農耕儀礼と動物の血（下）

——『播磨国風土記』の記述とその引用をめぐって

長 田 俊 樹

目次

- 一 はじめに
- 二 『播磨国風土記』讃容郡の條、および賀毛郡雲潤里の條の一節
- 三 ネフスキー・折口信夫・中山太郎
- 四 国文学・国文学史上のあつかい
- 五 古代民俗資料としての『播磨国風土記』と儀礼的狩猟—民俗学と民族学
- 六 史料としての『播磨国風土記』—日本史と考古学
- 七 神話としての『播磨国風土記』—比較神話学
- 八 「鹿の血、穴の血」の解釈（以上、第二〇集）
- 九 『播磨国風土記』原文の引用と先行研究の引用（以下、二二集）
- 一〇 これまでのまとめ

一一 筆者の立場とこんごの課題

一二 おわりに

参考文献

九 『播磨国風土記』 原文の引用と先行研究の引用

『播磨国風土記』がどのように引用されてきたのか。時代をおって、テーマごとにみてきた。もちろん、これまでのべてきた論文だが、『播磨国風土記』の讃容郡の條や賀毛郡雲潤里の條に言及しているわけではない。そこで、筆者が把握できた論文をとりあげて、『播磨国風土記』の原文の引用の有無や先行研究の有無を一覧表にしてみた。その一覧表によって、筆者がのべてきた引用の経過が、的を射たものなのか、明白になるであろう。とりあげた論文のうち、

同一著者による論文もおおくあるが、そのまま変更なく転載したものの以外はすべてあげた。おなじ著者のどの論文が問題の引用部分をいちばんさいしょに言及したのか。すべて網羅したわけではない。

風土記関係の文献目録については植垣（一九七二）や古事記学会編（一九八六・一九九二）、そして櫃本編（二九九五）などで検索し、かなりの文献をあつめたつもりである。しかし、こうした文献目録には、筆者がいちばん重要視するネフスキーの論文は掲載されていない。また、第五章でのべた「儀礼的狩獵」につらなるコンテキストで登場した本や論文もこれらの文献目録から除外されている。しかしながら、重要な論文や影響をあたえた論文は先行研究として言及されるはずである。すくなくとも先行研究として言及された論文は、すべてあつたつもりである。したがって、この一覧表から決定的な文献のみおとしはないと信じている。しかし、マイナーな論文のみおとしはもっと多いはずだ。その点についてはみなさまからご教示をおおぎたい。

では、つぎに一覧表の説明をしておこう。まず、うへの欄は論文の著者とその発行年。（―）は実際に小論執筆のさいに使用した文献の発行年で、「―」は使用した論文の初出年をしめす。論文の題名や発表雑誌等については、さいごの参考文献を参照のこと。まんなかの欄は『播磨国風土記』の讃容郡の條、および賀毛郡雲潤里の條の原文の有無をしめす。◎は原文があり、しかも原文の出典がし

めされていることをあらわす。○は原文があるが、その出典がしめされていない場合をいう。その場合、筆者の判断で出典がわかるときはへでしめした。また、独自の訓点などがどこされている場合には注として、表の最後に説明をくわえた。×は原文がなく、たんに『播磨国風土記』とか、「讃容郡の條」とかのべている場合をしめす。なお、記号のあとに、原文が漢文の場合は漢、訓み下し文の場合は訓、現代語訳文の場合は訳としてしめす。讃容郡の條を引用している場合や引用されないまでも、なんらかの言及がある場合は讃、賀毛郡雲潤里の條が引用されている場合やなんらかの言及がある場合は賀と、それぞれしめす。原文の出典はつぎのように略する。

標註Ⅱ栗田寛注釈『標註古風土記』大日本図書。

井上Ⅱ井上通泰校訂「播磨風土記」、『日本古典全集 古風土記集』日本古典全集刊行会

植木Ⅱ植木直一郎校訂『風土記集』大日本文庫刊行会。

武田Ⅱ武田祐吉編『風土記』岩波文庫。

秋本Ⅱ秋本吉郎校注『日本古典文学大系 風土記』岩波書店。

さらに、したの欄は先行研究について表示する。先行研究の引用や言及がまったくされていない場合は×でしめす。これらの條の解

釈にかかわるような先行研究と、小論であげた文献に言及した場合のみ文献名をあげる。そのさい、先行研究文献は著者名と発行年だけをしめす。くわしくは参考文献を参照のこと。また、これらの條の解釈には直接関係ないが、論証のために、先行研究として事例報告などを引用している場合で、しかも小論では言及していない論文を先行研究としてあげている場合には○でしめす。ただし、これらの文献をいちいちあげると、分量が多くなりすぎるので、その文献の著作名や論文名などはあげない。では、一覧表をみていこう。一覧表からどんなことがいえるのか。それは一覧表のあと、ゆっくりのべてみたい。

著者・発行年	原文・引用文献	先行研究の引用
ネフスキー「一九一八」	◎漢。讃・賀。標註。	鈴木（一九二二）
中山太郎「一九二〇」	×。讃。	×
倉野憲司（一九二九）	◎漢。讃・賀。（注一）	中山「一九二五」 中山（一九二六）
中山太郎（一九三〇）	◎漢。讃・賀。武田。	○
折口信夫「一九三二」	◎漢。讃・賀。（注二）	×
木村靖二（一九三二a）	◎漢。讃・賀。標註。	○
木村靖二（一九三二b）	◎漢。讃・賀。標註。	○
倉野憲司（一九三三）	×。讃・賀。	倉野（一九二九）
折口信夫（一九三五）	◎漢。讃・賀。（注二）	×

佐佐木信綱（一九三五）	×。讃。	×
中山太郎（一九四二）	◎訓。讃。武田。	宇野（一九四一）
小野武夫（一九四二）	◎漢。讃。	×
早川孝太郎「一九四二b」	◎漢。讃。	×
肥後和男（一九四三）	◎訓。讃。〈武田〉	×
鑄方貞亮（一九四三）	◎漢。讃・賀。井上。	○
松村武雄（一九四七）	◎漢。讃・賀。（注三）	折口「一九三二」
鑄方貞亮（一九四八）	◎訓。讃・賀。〈武田〉	○
横田健一（一九五一）	◎訓。讃・賀。武田。	折口「一九三二」 早川「一九四二a」 鑄方（一九四三） 宇野（一九四四） 松村（一九四七）
松村武雄（一九五八）	◎漢。讃・賀。〈標註〉	木村（一九四八） 折口「一九三二」
松本信広（一九五九）	◎訳。讃・賀。（注四）	○
川添登「一九六〇」	×。讃。	早川「一九三〇」
三谷栄一（一九六〇）	◎訓。讃・賀。〈武田〉	早川「一九四二a」
杉山晃一（一九六〇）	◎訳。讃・賀。（注四）	松本（一九五九）
桜井徳太郎「一九六二」	×。讃。武田。（注五）	×
倉塚暉子（一九六二）	×。讃・賀。	松村（一九五八）
伊藤幹治（一九六六）	×。讃。	○

土橋寛（一九六八）	×。讃・賀。	早川「一九二七a・b」 中山「一九二五」
山上伊豆母（一九六九）	○漢。讃。（注六）	○
横田健一（一九六九）	○訓。讃・賀。（注七）	折口「一九三二」 早川「一九四二a」 鑄方「一九四三」 宇野「一九四四」 松本「一九五九」
千葉徳爾（一九六九）	×。讃・賀。	早川「一九二七a・b」 小野「一九六四」
千葉徳爾（一九七二）	×	小野「一九七〇」
吉野裕（一九七一）	◎訓。讃・賀。秋本。	木村「一九三二b」 松村「一九五八」 鑄方「一九五七」
佐々木高明（一九七二）	○訓。讃・賀。〈秋本〉	早川「一九二七a」 千葉「一九六九」 横田「一九六九」 小野「一九七〇」
佐原眞（一九七三）	×。讃。	折口「一九三五」
千葉徳爾（一九七五）	×。讃。	早川「一九二七a」 小野「一九七〇」
谷川健一「一九七五」	×。讃・賀。	○
小松和彦（一九七七）	◎訓。讃・賀。秋本。	×
益田勝美（一九七七）	○訓。讃・賀。〈秋本〉	松村「一九五八」 佐々木「一九七二」
増田精一（一九七七）	○訓。讃・賀。〈秋本〉	○

竹村卓二（一九七九）	○訓。賀。〈秋本〉	佐々木（一九七二）
守屋俊彦（一九七九）	○訓。讃。〈武田〉	横田（一九六九）
渡辺昭五（一九八一）	◎訓。讃。秋本。（注八）	早川「一九二七a」
石川純一郎（一九八二）	×	早川「一九二七a・一 九三〇」 千葉「一九六九」 佐々木「一九七二」
石川純一郎（一九八三）	○訓。讃。〈秋本〉	石川「一九八二」 千葉「一九六九」
野本寛一（一九八四）	○訓。讃。〈秋本〉	早川「一九二七a・b」 千葉「一九六九」 小野「一九七〇」 石川「一九八二」
鳥越憲三郎（一九八五）	○訓。讃。（注九）	○
佐々木高明（一九八五）	○訓。讃・賀。〈秋本〉	千葉「一九六九」 佐々木「一九七二」 小野「一九七〇」 石川「一九八二」 野本「一九八四」
佐久間惇一（一九八五）	○訓。讃。〈秋本〉	早川「一九二七a」 千葉「一九六九・一九 七二」 佐々木「一九七二」
金関恕（一九八六）	×。讃。	○
萩原秀三郎（一九八七）	○訓。讃。〈秋本〉	○
野本寛一（一九八七）	○訓。讃。〈秋本〉	野本（一九八四）

橋本裕行（一九八七）	○漢。讃。	金関（一九八六）
白石昭臣（一九八八）	○訓。賀。〈秋本〉	小野（一九七〇） 千葉（一九七二） 佐々木（一九七二） 竹村（一九七九）
岡田精司（一九八八）	◎訓。讃・賀。秋本。	横田（一九六九）
鈴木英夫（一九八八）	○訓。讃・賀。 （注一〇）	佐々木（一九七二）
平林章仁（一九八八）	×。讃・賀。	○
橋本裕行（一九八九）	○漢。讃。	○
井口樹生（一九九二）	○漢。讃・賀。	×
瀧音能之（一九九二）	○訓。讃。〈秋本〉	×
春成秀爾（一九九二）	◎訓。讃・賀。秋本。	折口（一九三五） 横田（一九五一・一九六九） 佐々木（一九七一・一九八五） 佐原（一九七三） 岡田（一九八八）
石川純一郎（一九九二）	×。讃。	千葉（一九六九）
神田典城（一九九二）	◎訓。讃・賀。秋本。	佐々木（一九七二）
千葉徳爾（一九九二）	×。秋本。（注五）	早川「一九二七a・b」 小野（一九六四）
野口隆（一九九二）	◎訓。讃・賀。秋本。	○
浜田泰子（一九九二）	×。讃・賀。	○

三浦佑之（一九九二）	◎訓。讃・賀。秋本。	○
原田信男（一九九三）	◎訓。讃。秋本。	横田（一九六九）
高橋六二（一九九三）	○訓。讃・賀。〈秋本〉	×
村崎真智子（一九九三）	◎訓。讃・賀。秋本。	早川「一九四二a」 佐々木（一九七二） 千葉（一九七二）
大日方克己（一九九三）	○訳。讃・賀。 （注一一）	早川「一九二七a・b」 小野（一九六四） 横田（一九六九） 千葉（一九七五・一九九二） 石川（一九九二）
西宮紘（一九九三）	×。讃。	×
ナウマン（一九九四）	◎漢。讃・賀。 （注一二）	早川「一九二七b」 小野（一九六四）
田中・松下（一九九四）	×。讃・賀。	石川（一九九二）
橋本裕行（一九九四）	○訳。讃。	春成（一九九二）
松井章（一九九五）	◎訓。讃・賀。秋本。	佐伯（一九六七）
椎野若菜（一九九五）	◎訓。訳。讃。秋本。 （注一三）	佐々木（一九七一・一九八二・一九八五） 千葉（一九八六） 大林（一九九〇）
義江明子（一九九五）	◎訓。讃。秋本。	岡田（一九八八）

野本寛一（一九九五）	○訓。讀。	野本（一九八四） 岡田（一九八八） 平林（一九八八）
野本寛一（一九九六）	○訓。讀。〈秋本〉	×
辰巳和弘（一九九六）	○訓。讀。〈秋本〉	×
小山田（一九九七）	○訳。讀。（注一四）	×
佐原・春成（一九九七）	×。讀。	横田（一九六九） 佐々木（一九七二） 春成（一九九二）
中村慎一（一九九九）	○訳。讀・賀。	横田（一九六九） 岡田（一九八八） 春成（一九九二）

（注一）漢文に訓点をほどこした原文を引用。それまでの研究（ただし、敷田校注本は筆者未見）とは返り点の位置などがことなるので、倉野自身によるものか。

（注二）漢文に訓点をほどこした原文を引用。それまでの注釈では「而種稻其血」には句点はないが、折口は「而種_レ稻。其血」と、独創的な句点をほどこしている。この折口の漢文解釈を継承したものは筆者のしるかぎりみあたらない。

（注三）松村の原文は変則的である。漢文は標註にならない、訓点は武田にならっている。ただし、「大神妹妹二柱」が「大神妹妹二神」とあやまっている。

（注四）松本の原文は訓み下し文ではなく、訳にちかい。第二章であげた箇所を引用すると、「生鹿をとりふせしめ、その腹を割き、稻をその血に種えたところ」とある。それまでの訓みではここで切れるが、松本は「一夜の間に苗が生長し、これを取り殖えしめた。」とつづけている。本人による訳か。なお、杉山（一九六〇）はこの松本を引用した

とおもわれるが、上記の部分は「一夜の間に苗が生長し、これを取り残さしめた」とある。これは誤植であろう。また「生鹿をとりふせしめ」とあって、松本と若干ことなる。

（注五）桜井はいいきい原文を引用していないが、文献として武田が注にあげられている。これとおなじように、千葉（一九九二）も引用原文はないが、文献として秋本をあげている。

（注六）原文は漢文で、訓みは秋本にならう。ただし、原文引用のさいに「即令取殖」がぬけおちている。

（注七）武田をもとにし、原文を新かなづかいに統一している。ただし、「各（おのおの）」がぬけている。

（注八）三二一頁では、ここにしめしたように、秋本から引用しているが、一一〇頁では武田から引用している。

（注九）原文は植木から引用したとおもわれるが、すべて新かなづかいに統一されている。

（注一〇）鈴木の訓み下し文には、「稻をその血に種きき。」とあり、久松校註（一九六〇）を利用してのようにみえるが、「一夜の間に苗生ふ。」は久松校註（一九六〇）とも、秋本ともことなる。本人の訓み下しか。

（注一一）口語訳のある吉野（一九六九a）、倉野憲司訳（一九六六）、岡田・西宮訳（一九七七）とはことなる訳で、本人訳か。

（注一二）ナウマンの独文論文（Naumann 1963: 325）では、『播磨国風土記』への言及はまったくない。日本語訳の序によると、「日本神話の研究からいくつかの認識を得られたので、当時得られたイメージを補足したり修正せねばならなかった」（ナウマン一九九四・二）とあるので、日本語版のさいに補足したものとおもわれる。なお、日本語版の文献目録によると、『播磨国風土記』は皇学叢書を利用したところ、この皇学叢書は筆者未見。『古事記文献目録』で確認したところ、物集高見編で昭和二年に広文庫刊行会から出版されている。一方、野村・檜枝訳では秋本から引用している。

（注一三） 椎野（一九九五・八六）によれば、訳は上田正昭監修・椎野禎文訳『巨人と英雄の故郷―播磨国風土記の世界―』（一九八九。NHKきんぎメディアブランチ）を参考にしたとある。この本については筆者未見。なお、椎野は先行研究で大林（一九九〇）をあげているが、第六章でみたように、大林はこの『播磨国風土記』には直接言及していない。

（注一四） 小山田（一九九七・二七七）の引用は「種粃を鹿の血にひたすと、一夜にして芽吹いた」とあり、正確な引用とはいいがたい。一般書の限界をしめすものなのかもしれない。

この表からどんなことがいえるのであろうか。まず、原文については漢文から訓み下し文へ、というながれがわかる。それも、戦後をさかいに漢文は急速に姿を消した。また、訓み下し文では、栗田寛注釈の標註から武田祐吉の岩波文庫版、そして秋本吉郎の日本古典文学大系版へ、という原文引用文献の変化がはっきりとわかる。讃容郡の條と賀毛郡雲潤里の條の引用については、両方とも引用するケースがおおい。片方だけが引用される場合は、讃容郡の條のみという場合がめだつ。

では、先行研究の引用・言及についてみていこう。すでに、小論でも指摘したように、ネフスキー「一九一八」や倉野（一九二九・一九三三）、中山（一九三〇・一九四二）に言及したケースはいちどもない。戦前の研究では唯一、折口（一九三二・一九三五）への言及が六度みえる。このことは折口の影響力がおおきいことの証拠とな

ろう。いちばん言及回数のおおいは、早川孝太郎の諸論文である。早川のそれぞれの論文への言及を一回とかぞえれば、二二回にもおよぶ。また、小野（一九六四・一九七〇）への言及もおおく、一〇回ある。これは、『播磨国風土記』のこれらの條からみいだされる古代の民俗と、早川や小野が報告する農耕儀礼としての狩祭がセツトとして論述されていることを、如実にしめしているのにほかならない。

儀礼的狩猟を正面からとりあげた横田（一九六九など）、千葉（一九六九など）、そして佐々木（一九七一など）の引用・言及の回数をみると、佐々木は一五回、千葉は一三回、横田は九回となる。小論で再三指摘したように、佐々木がもっとも影響力があることが実数でしめされたことになる。千葉がおもいのほかおかつたが、それは千葉が執筆した一連の『狩猟伝承研究』の量をかながえと、とうぜんの結果といえるのではなからうか。出版年を考察すると、岡田（一九八八）や野本（一九八四）などはこれから引用されたり、言及される回数がふえる可能性がたかい。

こうした表はサンプルが多ければ多いほど、筆者が論点としてきたことの精度はますますである。こんご、どういふかたちでこれらが引用されていくのか。また、筆者の網にからなかった論文をさらに追加しても、この傾向にはかわりがないのか。まだまだ興味はつきない。とりあえず、今回はここまでとし、こんごもこれらの引

用史をみていきたいとおもう。

一〇 これまでのまとめ

小論では、『播磨国風土記』の讃容郡の條と賀毛郡雲潤里の條がどのように引用されてきたかについてみてきた。ここでもう一度、小論でのべたことをまとめておこう。では、その要点を箇条書きにしてみたい。

(一)『播磨国風土記』研究の中心をなすはずの国文学では、これらの條はあまり注目をあつめてこなかった。さいしよに、これらの條に関心をよせたのは民俗学者や民族学者である。こうした関心がほかの専門分野にもひろがっていき、近年では日本史や考古学でも注目をあびるようになった。ただし、国文学者のなかにも、倉野憲司のような例外がいた。

(二)これらの條は日本古代の民俗として、現存する日本の民俗や世界、とりわけアジアの民俗と比較されるようになったが、そのさいしよのころみをおこなった学者はネフスキーである。そのネフスキーは柳田邸での柳田国男・折口信夫・中山太郎との風土記輪読会によって、その古代の民俗と台湾の少数民族の民俗の類似を発見した。しかし、その後はこのネフスキーの研究はわすれさられてしまった。また、輪読会に出席した折口や中山も、古代の民俗として紹介したが、後世まで影響をあたえたのは折口信夫のみである。

(三)古代日本の民俗の事例として、アジアや日本の現存の民俗との比較をもとめた研究では、農耕儀礼としての狩猟、つまり儀礼的狩猟としてまとめられることがおおい。そうした研究の系譜をたどると、早川孝太郎から、千葉徳爾、そして佐々木高明へとのながれが想定できる。

(四)一方、日本史のなかで、これらの條に記述された民俗をどう位置づけるのか。その問題については、横田健一の研究がおおきな役割をはたした。日本史では、平安時代の狩猟儀礼や殺牛祭神とこれらの條との関連をさぐる研究が九〇年代以降みられる。また、考古学では、銅鐸の絵の鹿とこれらの條をむすぶ研究が佐原眞や春成秀爾によって進行中である。こうした最新の成果をみると、佐々木が焼畑耕作民が稲作以前に日本にもちこんだとみなしている儀礼的狩猟とこれらの條が記述する古代民俗との結合には、否定的にならないざるをえない。

(五)これらの條にみられる「鹿の血、矢の血」の解釈をめぐるては、呪術説、肥料説、ハイヌウェレ型神話説、鉄の生産との関連説などがある。そのうちの肥料説、ハイヌウェレ型神話説、鉄の生産関連説はあまり支持されていない。また、呪術説といっても、鹿に関連づける場合と動物の血に関連づける場合とがある。前者では、鹿⇨害獣説、鹿⇨地霊説、鹿⇨稲のシンボル説などがある。後者では、血の呪力説が有力である。

（六）これらの條が引用された論文をみると、時代とともに、引用原文は漢文から訓み下し文へと変化がみられる。とくに、秋本校注本が出版されて以後は、秋本校注本の訓み下し文を引用するケースが目立つ。また、讃容郡の條と賀毛郡雲潤里の條が両方引用・言及される場合がふつうだが、片方だけの場合は讃容郡の條のみに言及するケースが多い。

（七）引用された先行研究では事例研究となる早川孝太郎や小野重朗の論文がかなり多い。このことは『播磨国風土記』の一節と早川と小野が報告する儀礼とをむすびつけた研究が多いことをうらづけている。なお、横田健一、千葉徳爾、佐々木高明の諸研究のなかでは、佐々木、千葉、横田の順に、引用・言及が多い。このことは佐々木の研究がいちばん影響力があることをしめしている。

以上、小論をまとめた。さいしょは、ここでもかたんにこんごの課題をならべ、小論をとじる予定であった。しかし、これでおわってはいくまでの研究のアナさがしに終始したようにみえるかもしれない。筆者はあくまでも自分自身の稲作文化論を展開するための、建設的な研究史回顧をめざして小論をかいたつもりである。この小論がほどこえがたいまま、よみかえしてみた。たしかに、それぞれの論文にたいする評価ははっきりとして、筆者の立場はあきらかになってはいる。しかし、正直いって、とても建設的とはいえない。とくに、批判を展開するあまり、ささいなことにこだわっているよ

うなところがないわけではない。そこで、批判する以上は筆者の立脚点をはっきりさせるべきである。というわけで、あえて蛇足といわれようが、もう一章追加して筆者の立場とこんごの課題をかいとおきたい。

一 筆者の立場とこんごの課題

筆者がここであきらかにしたいのは方法論についてである。とくに、フィールドか、文献か、という問題にかかわる。結論からいえば、フィールドワーカー対文献学者という構図はほとんど意味をもたない。問題となるのは帰納的方法論か、演繹的方法論か、ということである。その問題にはいるまえに、なぜこの小論をかく気になったのか。その動機からのべてみたい。

第一章にのべたように、筆者は一九九五年に「ムンダ人の稲魂觀念についてーインド稲作異質論をめぐってー」を執筆した。そのさい、ムンダ人の稲作儀礼と日本の稲作儀礼の類似に注目した。そのおおくは東南アジアの稲作儀礼と日本のそれとの類似を指摘した先達たちによって、すでに論じられたものであった。そのひとつが稲作儀礼に動物の血がもちいられるという習俗である。そして、日本では殺生をきらう仏教思想が流布して以後はこうした習俗がみられなくなったが、かつてはあったというかたちで、この『播磨国風土記』の讃容郡の條と賀毛郡雲潤里の條が引用されるケースにぶつ

ったのである。その時点で、筆者がとりあげた論文はネフスキー（一九七二）、中山太郎（一九四二）、松本信広（一九五九）、鳥越憲三郎（一九八五）の四論文である（長田一九九五b・六九）。これらの論文をみると、それぞれの執筆者が『播磨国風土記』のこれらの條を、あたかも自分が発見したかのようにかいたものが散見され、とてもおどろいた。それがこの古典の引用史という、これまでほとんどなかった種類の論文をかこうとおもいたった動機である。したがって、古典引用の原則といったものを問題にしようかともおもった。しかし、筆者自身、引用の原則が確立しているわけでもない。また、一般的にどうした原則があるかもしれない。そこで、古典引用の原則を焦点にした論文はあきらめた。そのかわり、専門分野別に、引用のされかたにどんなちがいがあるのかをテーマに論を展開した。その結果がこの小論である。

ところが、小論をまとめてみると、引用史をたんととのべるのとはほどとおく、筆者の立場から、先行研究の批判といった様相がこくなってしまったのである。そうなると、批判者として、筆者の立場をはっきりしておいたほうがよからう。そう判断し、この章をかきたした。ただし、引用者としてのモラルということでは、あまり議論の余地はない。自分が利用した先行研究ははっきりと参考文献としてあげる。このことにはだれも異論をとないはずだ。そうした問題では、わざわざあきらかにせねばならない筆者の立場

などはない。

ここで問題なのは方法論である。筆者は第五章で、儀礼的狩獵というコンテキストでかたられる『播磨国風土記』の一節を問題とする場合に、横田健一（一九六九）が先行研究としてあげられないことに不満を表明した。そして、フィールドワーカーと文献学者にみえないあつい壁があることを指摘した。そう指摘する筆者の立場とはどうなのか。それをあきらかにしたい。

ひとが「おまえはフィールドワーカーか。それとも文献学者か」と質問を発したら、どうこたえるか。こたえはかんたんだ。「おれはフィールドワーカーである」と。筆者は文献学者としてのトレーニングはまったくうけていない。筆者が専門とするムンダ語の研究はフィールドワークなしでは成立しえない。ムンダ語には書記文字はないし、デヴァナーガリー文字を使用するようになったのは独立後で、しかも正書法は確立していない。そんな状態なので、文献史料などはほとんど存在しない。ムンダ語を記述するにはフィールドワークは不可欠なのである。ところが、フィールドワーカーとして、フィールドワークからえられたデータを全面にだした論文だけがすばらしいと感じるかという、そうでもない。そういう論文よりも、文献をたんねんによみこんで執筆した論文のほうに親近感をおぼえることがある。つまり、フィールド対文献という構図はどうも問題ではないようだ。では、なにが問題か。それは帰納法対演繹法とい

う構図におさまるのではないか。そこで、この構図を問題としてみよう。

筆者は言語学のトレーニングをうけた。いまでも、専門はときかれれば、躊躇せず言語学とこたえる。その言語学では、かつて方法論的な一大革命とみえるような事件がおきた。いわゆるチョムスキー革命である。チョムスキーはそれまでの言語学は帰納的であると位置づけることから出発し、みずからの研究を演繹的とみなし、それまでのアメリカ構造主義言語学ではゆきづまっていた統語論の研究に新境地をきずいた。チョムスキーはこうかんがえた。どんな子供でも、文法にてきした文だけを生成するように言語を習得するが、それはすべての文を記憶するのではなく、かぎられた文法規則を習得し、無限の文を生成するからである。つまり、文法を記述するためには、こうしたかぎられた文法規則をみつければよい。そして、この文法規則は演繹的モデルとして提示することができるといわれるのである。しかも、この演繹的モデルはすべての言語にあてはまるような普遍文法をも想定できるのである。こうして提示されたものは演繹的モデルⅡ文法規則の式である。こうして、ネイティヴ・スピーカーをなやませる、この文は文法的にただしいかといったネイティヴ・スピーカーへのテストが横行する。

たしかに英語の研究など、かなりの研究の累積が膨大な場合にはこうした研究が有効なことはよくわかる。ところが、まだしつかり

とした文法の記述がないようなムンダ語の研究にはまったく意味がない。かつて、ランゲンドンという言語学者がムンダ語の記述をこころみたことがある（Langendoen 1967a, 1967b）。ランゲンドンは当時の生成文法のモデルをムンダ語に一生懸命あてはめようとした。ところが、うまくあてはまらないので、「ムンダ語動詞形態論は他の言語の動詞形態論とくらべ、これほどむずかしいものはない。そのことは認めざるをえない」（Langendoen 1967b: 57）とのべている。その後、ランゲンドンはムンダ語の研究から手をひき、生成変形文法の専門家となり、その著は『英語変形文法の要点』として邦訳されている（ランゲンドン一九七二）。このことはランゲンドンがけっして言語学のできがわるかったわけではなく、ムンダ語文法が演繹的モデルという発想では解決できない問題をかかえていたということなのである。

筆者の個人的な体験だけであれば、正直いって、演繹的モデルをあえて問題とする能力も勇気もない。ところが、一九九六年にオーストラリアにいき、演繹法ではなく、帰納法で十分やっていけるのだと自信をもった。そのときの体験やオーストラリアの言語学界についてはべつのところでかいたので、ここではくりかえさない。拙稿（長田一九九七）参照のこと。しかも、言語学全体としても、チョムスキー革命を批判的にみる論文（たとえば、Koerner 1983 はチョムスキー革命自体を否定しているし、Newmeyer 1986 はチョムスキー

「革命は認めるものの、実用化というレベルで失敗していることを指摘している」も登場した。また、一九九一年のアメリカ言語学会総会では「消滅の危機に瀕した言語シンボジウム」がおこなわれ、まだ記述されていない言語への関心がもつたかまっている。つまり、演繹的モデルよりも、帰納的にみちびくために必要なデータのほうがずっと重要視されるようになってきたのである。演繹的モデルは数式のようにすっきりしたかたちで表示される。帰納的になにかをみちびくには網羅的なデータが必要で、しかも一般化は一朝一夕ではうまくいかない。筆者の友人であるオーストラリアの言語学者はいう。帰納的な一般化で、演繹的モデルと対抗するといったことではなく、一般化できないまでも、こうした例外的なケースがフィールドからえられたということだけで、十分フィールドワーカーとして評価されるべきではないかと。これで筆者がフィールド対文献といった図式よりも、帰納法対演繹法といった図式のほうがずっと重要であるといった意味が理解していただけたのではなからうか。

言語学にふかくはいりこんでしまった。しかし、この帰納法対演繹法という図式は言語学にけっして限定されるわけではない。文化研究ということでいえば、帰納法について、フレイザーのつぎのこ

とばをおもいだす。

帰納的方法のこの一般的長所もさることながら、現今の人類

学がこの方法に従うべき特別な理由があります。確実に帰納学を行うためには多くの事実の集積が必要です。したがって帰納的科学は、一般化を行うに先だつ事実の集積期を不可欠とするのです。事実の観察が大量に集積され分類されてはじめて、そこに通底する一般法則が表面に浮上してくるのです。現在の人類学、なかんずく制度史は、この資料収集の段階にあるのです。人類学の研究が今最も必要としているのは、理論よりも事実なのです。起源を扱う研究の分野については特にそうなのです。というのも、先ほど申しましたように、多くの重要な制度は、その起源を未開の段階に探ることができ、したがって、人類の黎明期の歴史の研究にとって、未開人はこの上なく貴重な資料なのですが、この資料が、当然それに値する注目をはらわれるようになつたのは、近年のことにはすぎず、そして不幸なことに、彼らは私たちの眼前で滅んでいこうとしているからです。——

（中略）——現在の人類学が抱える最も緊急の課題は、未だ消滅しきつてはいない未開人の諸慣習やものの考え方を、ことごとく姿の消え去ってしまいう前に、記録に残しておくことなのです。（フレイザー。折島・黒瀬訳一九八六・七）

このフレイザーの講演は一九〇四年におこなわれたものである。いまどき「未だ消滅しきつてはいない未開人の諸慣習やものの考え

方」なんて問題にしてなんになる、という声がきこえてきそうである。しかし、言語学が「消滅の危機に瀕した言語プロジェクト」を発足させたのはつい一九九〇年代になってからのことである。たしかに、「未開人の諸慣習」というのは問題があるかもしれない。ただし、小論であげた「儀礼的狩猟」についてみると、やはりそのデータをあつめることが肝心なおもう。一九〇四年からほぼ一世紀がたついま、フレイザーのことは鵜呑みにはできない。それは理解しているつもりだ。しかしながら、「帰納的方法」と「理論よりも事実」という基本的態度には、筆者をはじめ、フィールドでまだよく記述されていない言語と日夜格闘している言語学者たちはおおいに共鳴するのである。

では、この基本姿勢と小論との関係はなんなのか。もうすこし、具体的にのべてみよう。

問題となるのは横田（一九六九）や千葉（一九六九）をうけて、佐々木（一九七二）が提示した焼畑農耕民の習俗Ⅱ儀礼的狩猟というコンテキストに、『播磨国風土記』の一節を引いて、稲作渡来以前の縄文時代に、日本へもたらされた習俗であるという推論である。まず佐々木は、早川孝太郎が報告し、横田や千葉が引用したシシ祭りと『播磨国風土記』の一節を儀礼的狩猟でくるといったモデルに同意する一方で、日本文化を重層的にとらえる岡のモデルに同意する。それぞれのモデルは帰納的にみちびかれたもので、それ自体

は時代的制約があるものの、あるていどのコンセンサスがその時代にはえられた説である。ところが、佐々木はそのモデルを演繹的なものとしてうけいれ、ふたつをかさねあわせたのである。しかし、そこには齟齬が生じる。つまり、『播磨国風土記』がえがきた世界は焼畑耕作民のそれとはちがう、という大林や吉田の指摘がある。それぞれのモデルをささえるデータは当然ことなる。したがって、ふたつをかさねるとおもわぬおとし穴にはまりこむことになる。もちろん、『播磨国風土記』の一節からえられる古代の習俗は、稲作耕作がひろがったのちも、焼畑耕作民がもたらした習俗がのこっている結果であると解釈することも可能である。しかし、佐々木はこの齟齬に気がついていないのか、まったくこうした解釈を提示していない。さらにあげれば、鹿と稲のむすびつきは弥生時代以降であるとすると、考古学者の春成秀爾の指摘もある。すべてのデータをならべたあと、帰納的に一般化をおこなえばこうした齟齬に気がつくし、この齟齬ははっておけばよいというほど樂觀できるものではないことに気がつくはずだ。筆者はそのことを指摘したのである。そのために、演繹的方法論と帰納的方法論の大前提を議論してきたのである。

また、帰納的方法論と演繹的方法論の問題にくわえて、うえであげたフレイザーの「理論よりも事実」という指摘に関連して、もうひとつのべておきたい。それは直接『播磨国風土記』の一節とは

かわらないが、佐々木が依拠した岡正雄の日本文化の基礎構造についてである。岡はウィーン大学に提出した博士論文『古日本の文化層』にもとづいて、つぎのような日本文化の基礎構造を提示した。

- (一) 母系的・秘密結社の・芋栽培―狩猟民文化
- (二) 母系的・陸稻栽培―狩猟民文化
- (三) 父系的・「ハラ」氏族的・畑作―狩猟民文化
- (四) 男性的・年齢階梯制的・水稻栽培―漁労民文化
- (五) 父権的・「ウジ」氏族的・支配者文化

(岡一九五八・七)

この岡のシェーマについては二つの見解が存在する。一つは住谷一彦の見方であり、もう一つは大林太良の見方である。住谷は岡の「古日本の文化層」について、こうのべる。

岡さんの「文化層」論は、考古学、先史学、総じて歴史学にみられるようなクロノロジカルな、方法的に言えば概念実在的な思考とは無縁なものだということである。岡さんも或るところで言及されていたと思うが、その「文化層」の概念は、あくまでも理念型 Idealtypus であり、決して実在型 Realtypus ではない。すなわち、言ってみればそれでもって現実を認識する

ためのモデルであり、それでもって現実の模写を目指すものではないのである。それはガオーティッシュな現実の思维的順序を目指すものであり、その意味関連を発見するための索出手段として機能することが望まれているのである。この「文化層」概念があたかもそのようなかたちで現実の歴史のなかに存在するか否かという仕方では妥当性を問われることは、全く的を失したものだと言わなければなるまい。(住谷一九七九・四四〇―四四二)

一方、大林(一九七七)は「日本文化の五つの源流―日本民族起源論と岡正雄学説」と題して、住谷が「全く的を失したもの」とのべる方法で、岡の提出したシェーマを、実在論にたつて検証している。この岡の理論にたいするふたつの見解は重要な相違である。つまり、岡を理論家と位置づけ、日本を多くの文化層からなるというモデルを提示したことを評価するか、あるいは具体的な文化層の妥当性を問題とするかというちがいである。これは、まさに理論か、事実かという問題を集約しているにほかならない。

現在の文科系の学問はほとんど住谷の見方に荷担している。事実よりも、いかに解釈するか。いかにモデル化して、欧米の理論であじつけすることが要求されている。もっとも理念型というのは時代とともに変化し、岡理論が理念型として登場することはいまの時代

にはない。しかし、こうした住谷の見方は継承され、ある文化についての具体的なデータよりも、いかに流行の理論を把握しているかがとわれる。やや極端に言えば、サイドのオリエンタリズムとベネディクト・アンダーソンの想像の共同体、カルチュラル・スタディーズをうたい文句にした国民国家形成論（これらもいずれはふるくなってしまおうが）に、データをあてはめておけばよいのだ。かつて、マルクス主義で理論化されることのほうが、事実を記述するよりもだいたいだったように。

こうしたなかで、大林が孤軍奮闘、実在論を展開していることは尊敬にあたいする。しかし、大林は言語学の成果に気をくばった岡のシェーマには懐疑的で、「特定語族ないし語群を担い手とする種族文化複合という概念では、たとえば交易などを媒介とした個別的な文化要素の伝播・浸透などの現象がうまく蔽えないという反面がある」（大林一九七七・一六三）として、語族による担い手という見方は留保している。言語学をやっているものにはこのへんが不満である。さいきん、オーストロネシア語族については、その源郷をはじめ、祖語時代の文化についてもおおくのがわかるようになってきた。たとえば Tryon (ed) による『オーストロネシア比較言語辞典』やオーストラリア国立大学が中心となった Peter Bellwood, James J. Fox & Darrell Tryon (eds) (1995), James J. Fox & Clifford Sather (eds) (1996) などの論文集が出版された。これ

を利用しない手はない。さいきんのオーストロネシア研究には目をみはるものがある。いくつか重要なものを、一九九四年以降にかぎって、欧文参考文献として、さいごにあげておいた。もし実在論を堅持したのであれば、言語は重要なファクターである。語族による担い手という見方だけでは解決できない問題があるのはたしかだが、単語の借用関係と文化項目の借用関係には相関関係があることはまちがいない以上、言語学の成果を軽視することはない。オーストロネシア語族は日本の文化形成になかしの影響をあたえたこととはうたがない。岡の理論を実在論的に検証するときには、こうした研究を網羅的にあつめて、帰納的に構築してほしいとねがうのだが、専門化のすすんだいまとなつてはなかなかむずかしいのが現実なのだろうか。

さらにここでもうひとつ、理論が事実かという問題に関連して、東洋史学者宮崎市定のことばを引用しておきたい。

日本の歴史学界に唯物史観が輸入されてから色々な混乱が起きた。最も困るのは事実よりも理論を優先させる者の多いことである。中世は封建時代の世の中だと言われれば、中国古代の封建は封建ではない、などと言いつつ、強いて中国古代の封建制を、封建として生かそうと思えば、郭沫若のように中国中世は周代から始まった、などと規定しなければならなくなる。史

観とはそもそも歴史事実の見方、説明の仕方であるべきであつて、先ず史観を立ててから史実をそれに奉仕させようとすれば、本末顛倒これより甚だしきはない。(宮崎一九七九・一四〇)

宮崎は理論か事実かという問題と史実にもとづく帰納法か史観をさきにたてる演繹法かという問題の関連性を明確に指摘しているが、このことは歴史学だけに限定されることではない。それはうえの議論からあきらかである。

以上、演繹法と帰納法にはじまって、理論か事実かという問題を見てきた。ただし、事実ということについては注意しなければならぬ点がある。それは、解釈のない事実はないといった立場が存在することだ。そうした指摘にそなえるために、事実をなまのデータとおきかえてみようかとおもった。しかし、それとて、データはデータをあつめた人の恣意的操作のたまものであるといわれればきりが無い。したがって、ここでのべた事実とはコンセンサスのえられる、客観的なデータというぐらいに理解していただきたい。

こうした事実をめぐる議論はさておき、筆者は事実から出発して、帰納的に理論をみちびきたいとかがえている。その立場にたてば、こんごの課題にたいする筆者の方向性はおのずとときまってくる。そこで、こんごの課題として、ふたつあげて、小論をしめくりたい。どちらも言語学と関連する。まず第一には、共時的なレベルと通時

的なレベルの区別をはっきりとつけるべきであるということ。もう一つは、儀礼的狩猟について、分析するための儀礼の意味分析をかんがえてみる必要があるということ。以上、二点である。まず、共時的レベルと通時的レベルの混同についてのべる。

『播磨国風土記』の成立年代について、秋本校注(一九五八)は「和銅六年(七二三)の官命後幾程もなく一応の編述を了えたものと見てよい」(二七頁)と指摘している。まず、その時代の共時的な農耕儀礼を考察することが必要である。この小論でとりあげた論文の多くは、たぶん『播磨国風土記』全文をよまずして、まごびきしてかかれたものであらう。それ自体をけつしてせめるつもりもない。また、告発しようというわけでもない。しかし、共時的なレベルでの考察ぬきに、通時的な考察に走ってしまうのは危険だ。そうしたいのである。どうも類似した民俗を時代考証抜きに、あんにむすびつけてしまいがちである。

もうすこし具体的には、共時的な記述と通時的な論証が混同されている例として、ふたたび佐々木高明の研究をとりあげてみよう。佐々木は、儀礼的狩猟の例として、インドのバーリア族の共同狩猟などと日本の「シシマツリ」をあげたあと、こうのべている。

だが、日本とインドとは、地域的にはあまりにも隔たっており、両者の直接的連関を論ずることには大きな抵抗を感じる。

この二つをつなぐ失われた環は見出せないものだろうか。

（佐々木一九七一・二三二）

そして、ラーマンのあげるヴェトナムのムオンの例や台湾の少数民族の例を報告し、つぎのように結論づける。

事例の数と場所がかなり限られているが、こうしたインドシナや台湾の例を中間にはさめば、わが国とインドの春の儀礼的狩猟の慣行の系譜とその伝来の方角を示唆することになる。おそらく、それは東南アジアにおけるオカボ栽培型に先行する雑穀栽培型の焼畑耕作文化を構成する一つの文化要素として、東南アジアからわが国に伝えられてきたものと仮定してほぼ誤りないものと考えられる。（二三四頁）

この佐々木の論法にはおおきな問題がある。それは佐々木がのべている「この二つをつなぐ失われた環」という表現にかかわる。ここの「失われた環」とは、現時点での分布をさす。しかし、こうした共時的なレベルでの非連続的分布をミッシング・リングとよぶのが適切なのかということはおおきな問題である。すなわち、言語学の成果をみれば問題の所在があきらかとなる。共時的な分布に連続性がなくとも、通時的にいえば、同系である場合がある。それは

系統のこととなるトルコ語やアラビア語などで連続していない印欧語の例である。また、あれほどはなれているが、マダガスカル島のマラガシー語はオーストロネシア語族に属する。厳密にいえば、もういちど、データを整理して、なにをもって儀礼的狩猟とよぶのかという点もふくめて、その共時的な分布と通時的な解釈を議論しなおす必要があるのではなからうか。

そもそも時間軸の混同がなぜおこるか。それは共時的な分析方法が確立していないからである。では、儀礼分析を主観的・個人的なレベルではなく、ある一定の規則にのっとれば到達できる普遍的なレベルでおこなえないのか。儀礼比較のためには、どうしてもある程度コンセンサスをえられるような規準を設定する必要がある。そうすれば現在のシシマツリと『播磨国風土記』に記載された儀礼との関係や東南アジアでの農耕儀礼との関係ももっと明瞭となる。その規準をどのように設定するか。それが第二の課題である。そこで、その儀礼分析の試論をつぎにあげる。それは、まず儀礼素といったものをたてることである。そして、その儀礼素の弁別の特徴、すなわち素性をたてる。それによって、それぞれの儀礼素の類似程度をはかるといった方法論である。これらはいずれも言語学の方法論に適応している。そこで、言語学における比較方法を念頭におき、農耕儀礼における比較の方法をたててみたい。

まず、言語学における比較方法とはどのような方法論なのか。そ

これから説明をはじめよう。比較方法とは、ふたつ以上の言語が共通の源である祖語からわかれたかどうか、すなわち同系かどうかを証明する方法である。いくつかの言語が系統をおなじくするということは、音韻変化が規則的におこなわれるという事実が発見されたことによって、はじめて証明されたが、その方法が確立したのは一九世紀のことだ。つまり、言語の比較研究は、音韻というより小さなレベルをかんがえることによって、またその音韻が規則的に変化することがあきらかになったことで、厳密な実証的研究となったのである。具体的にいえば、ふたつ以上の言語について、おなじ意味をもつ単語の音韻を比較し、その対応の仕方に規則性がみいだされるかどうかを検証していく。そして、その規則性がだれの目からもあきらかになったとき、これらの言語が同系統であることが証明される。この方法を比較方法とよぶのである。

その後二〇世紀にはいって、言語学は通時的研究よりも共時的研究がさかんになる。すると、音韻や音素よりもさらに小さいレベルでの分析がなされるようになる。それが弁別的特徴 (distinctive features) とよばれるものである。弁別的特徴とはなにか。具体的にみると、たとえば、*p/b* という音素がある。その調音点 (両唇音) や調音の仕方 (閉鎖音) はおなじだが、無声と有声という対立だけがある。これを言いなおすと、*p* の対立は弁別的特徴である。「一有声」と「十有声」の対立である、という。つまり、音素より

もさらに小さいレベルである有声性や調音点による素性、調音の仕方による素性を弁別的特徴とよぶ。そして、音素はこの弁別的特徴の束としてとらえるようになり、弁別的特徴は「土素性」として表示されるのである。なお、なにを弁別的特徴とみなすかについては、言語学者によって若干こととなるが、弁別的特徴をたてることには異論はない。

そこで、この言語学の成果を儀礼研究にあてはめることはできないのか。すなわち、儀礼がある程度普遍的な尺度を導入して比較することはできないのか。そのためには、言語の比較研究に必要なた音韻や音素にあたるものをたてれば可能ではないか。また、はたして儀礼の弁別的特徴はたてることができるのか。これらの問いに対してはそれを解く鍵がある。それは弁別的という概念にある。弁別的とは、ある素性が関与することで意味的差異が生じることを行う。たとえば、日本語の *baka baka* 《馬鹿、馬鹿》と *paka paka* 《馬が》ばかばかとが意味に差異を生じさせるのは *p/b* が弁別的であるためである。ところが、おもいきり息をはきながら (音声学用語では帯気音とよぶ) [*b'aka b'aka*] 《馬鹿、馬鹿》といったとしたら、女性が一種の愛情表現として発したとか、かぜをひいてのどに違和感を感じて咳をしそうなときに発したとか、そういった言語外コンテキストを推測することは可能かもしれないが、基本的な意味はかわらない。これは日本語において、*p/b* つまり素性

「二帯気」と「十帯気」が弁別的ではないからである。この類推を儀礼にあてはめれば、儀礼における弁別の特徴をたてることができる。そこで、儀礼の有意意味な要素、差異をうみだす素性を儀礼の弁別の特徴、あるいはたんに素性とよぶことにする。

では、具体的にはどう分析するのか。『播磨国風土記』の讃容郡、賀毛郡に記載されている儀礼をとりあげて、この弁別の特徴による分析の有効性をみておこう。ここでの解釈は、『播磨国風土記』での描写が農耕儀礼であるといった大前提にたっている。『播磨国風土記』の記載事項はいつさい事実を反映しておらず、たんなる「つくり話」にすぎない。そういった立場では、東南アジアの農耕儀礼と対比させることじたいが意味をなさない。農耕儀礼とみなせば、東南アジアの農耕儀礼との共通する弁別の特徴として、「十血」をあげることができる。この「十血」という素性を手がかりに、上位の意味素性から下位の意味素性へと考察することによって、それぞれの儀礼の遠近度をさぐれるのではないか。これがこの方法論による利点である。

では、その上位の意味素性から下位の意味素性へ、分析の手順はどういったものなのか。たとえば、うえで「十血」という素性をあげた。血をだすものはかぎられる。植物や物からは血はでない。そこで、この素性は「十動物」と同様である。そして、動物を人間と人間以外にわけることがごく一般的な分類法である。そこで、「十

動物」を「十人間」と「一人間」にわけると、前者は人身供儀を意味する。稲作儀礼として人身供儀がおこなわれていたといった報告は雲南の少数民族ワ人などにみられる（鳥越一九九五）。こうした下位区分を次々とたてることによって、出血供儀の連関性を素性によって表示できるのである。たとえば、「一人間」はさらに「十家畜」（ウシ、スイギュウ、ブタ、ニワトリ、ヤギなど）「一家畜」（シカ、イノシシなど）に、下位素性をたてることができる。そして、それぞれの素性によって、それぞれの儀礼の意味をあきらかにできるのである。また、これら素性はつぎのような事実によってささえられる。動物の意味範疇は、人間を包摂し、動物であるが人間ではない意味範疇は、家畜を包摂する。こうした普遍的な意味範疇の構造に依存してはじめて、儀礼の弁別的な素性が構造をもつ。いいかえれば、このことによって、意味素性にもとづく方法論は普遍性をもつといえるのである。

こうした分析方法は比較するさいに重要な意味をもつ。比較の規準となる素性がどのように関連づけられるか。ここで問題になっている農耕儀礼における出血儀礼を例にかんがえてみよう。これまでの研究によれば、出血儀礼として、有名なのは人身供儀、現在もつとも多いニワトリ供儀とブタ供儀、インドネシアの農耕儀礼でみられるスイギュウ供儀などが知られている。これらと、シカ供儀を比較すると、ヒトとほかのニワトリ、ブタ、スイギュウおよびシカと

では素性的にあきらかに距離がある。一方、ニワトリとブタ、スイギュウでは「十家畜」という素性までがおなじであるが、シカでは「十家畜」という素性は関与しない。

こうした素性分析をおして、どんなことがいえるのか。まず、一般論からのべる。第一に、下位素性を共有する儀礼は近親性がたかいたかんがえることができる。また、通時的に言えば、人身供犠はなくなり、いくつかは動物供犠へと移行したとかんがえるのが一般的であろう。また、動物供犠でもいちど「ニワトリ」のレベルまでおりてしまうと、色による弁別などへと意味素性がさらに下位へ移行してしまう。筆者のフィールドであるムンダ人の場合、ニワトリの色によって捧げられる神がことなる。つまり、一般的な傾向として、上位素性から下位素性へ移行しやすいといえるのではなからうか。そうした一般的な傾向を比較のさいの目安としたいのである。

それでは、この事例ではどうだろうか。まず、シカとほかの動物では「一家畜」「十家畜」のちがいがある。また、「十シカ」という素性自体は東南アジアのものではなく、北方のものである。北方のシャーマンがシカの皮を使用する。儀礼とシカをむすぶのは北方的といえる。一方、農耕儀礼、とりわけ稲作儀礼において、インドネシアでは「十スイギュウ」という素性が大きな意味をもつ。かつて、de Josselin de Jong (1965) はインドネシアと東南アジア大陸部の

農耕儀礼について、稲→スイギュウ→死→再生複合観念を共通の特徴として、意味素性分析をこころみたことがあった。じつは、このスイギュウとシカをむすぶ素性がある。それは「十角」である。この素性分析にもとづけば、南から稲をもちこんだ人々が、スイギュウの代わりにシカを動物供犠にもちいた。そういった解釈がなりたつ。なお、この出血儀礼の意味については、de Josselin de Jong が指摘した死→再生原理とみなせばよろう。これが筆者の解釈試論である。

これまではどうも儀礼的狩猟と関連させようとするケースがめだつた。しかし、儀礼的狩猟と『播磨国風土記』の一節との関連性は自明の理であり、もう定説になっているのだといったように断定するのは危険だ。すでに指摘したように、後者をインドにみられるような儀礼的狩猟と同根であると断定するには、狩猟の対象がシカという点にどうしてもひっかかる。つまり、シカが儀礼的に意味をもつのは、すでに指摘したように一般的には北方的とかんがえられている。その点を考慮すると、通時的にインドでの儀礼的狩猟とむすびつけることが妥当なのかどうか。議論が必要であらう。それよりも、農耕儀礼におけるスイギュウ供犠とむすびつけたほうが、自然ではないか。素性分析がこの仮説を支持している。もっとも、共時的なレベルで、儀礼的狩猟がどこまでひろがっているのか。これまでに、あきらかになったとはいえない。ラーマン以後、研究がすすん

だようにはとてもおもえない。「播磨国風土記」の一節と儀礼的狩猟の連関をかんがえる前に、こうしたデータの集積はかかせない。

さいごの章は余分だったかもしれない。しかしながら、帰納的な方法論と演繹的な方法論というのは根源的な問題であって、帰納的方法論をとることを宣言することはこんごの筆者の研究すべてについてうけることなので、どうしてもおきかたかった。また、ここで問題となるような儀礼的狩猟と『播磨国風土記』の一節や早川孝太郎が報告するシン祭りとの関連を論じるときに、これらを取りあつかう民族学と密接にかかわる（あるいは、かつては密接にかかわっていたといなおした方が現実にはそつているかもしれない）言語学からみると、どうも共時的レベルと通時的レベルの混同が気になった。さらに、岡のモデルなどもあきらかに言語学の影響下にたてられたシェーマであるにもかかわらず、言語学不在のかたちで議論がすすんでいる気がしたので、ついついひとことおおくなってしまうた。

さいごに、これまでの議論への異議をとなえるだけではなく、筆者自身の解釈もしめした。筆者は『播磨国風土記』の一節と儀礼的狩猟とはむすびつかなかった。むしろ、儀礼的狩猟というものをはずしたうえで、インドネシアなどでおこなわれているスイギュー供儀と『播磨国風土記』の記載を関連づけた。そのさい、これまでの血の呪術などの解釈ではなく、稲魂再生原理にもとづく儀礼との解釈をしめした。これらの仮説は筆者独自の見解がないとの批判にこ

たえるために追加したものである。したがって、この仮説の妥当性について、自信があるわけではない。また、説明不足でとうとうな印象をあたえたかもしれない。筆者は現在ムンダ人の農耕儀礼についてまとめている。筆者の仮説等についてはアジア稲作儀礼全般のなかで論じられるはずである。くわしくは、そちらをご覧ください。ばさいわいです。

一二 おわりに

小論では、『播磨国風土記』の讃容郡の條と賀毛郡雲潤里の條がどう引用されてきたのかをみてきた。さいしょの目的では、専門分野がことなれば、引用のされかたがどのようになるかをあきらかにしたかった。そして、その目的にそつて、章だてをしたつもりである。ところが、小論をふりかえると、論じかたにむらがある。正直いって、儀礼的狩猟についてが中心になってしまった。これもたぶん、儀礼的狩猟が筆者がフィールドとするムンダ人のあいだにもみられるという理由からそうってしまったのであろう。しかし、あえて儀礼的狩猟論とせず、引用史という体裁を堅持したのはネフスキーや中山太郎、そして倉野憲司といったわすれられた業績をほりおこすねらいもあった。

かつては、専門分化がすすんでいなかった。国文学者の倉野憲司が民俗学的視点を披露したり、農業経済史家の木村靖二が記紀を論

じたり、いまではかんがえられないことである。専門化がすすんだ現在、言語学を専門とする筆者が国文学や日本史の業績を紹介するのは、ためらいやとまどいがどうしてもつきまとう。そうした態度が日本史や国文学を紹介するときのきれのわるさにつながっているであろう。一方、儀礼的狩獵については、ムンダ人のまつりとの関連ですでにしらべたことがあり、筆者の立場もはっきりしている。

かんがえてみると、この小論はかなりの冒険だ。ひとこといいわけがましいことをのべると、筆者はインドに六年以上すんでいた。インドにながく滞在すると、誇大妄想的になりがちだ。したがって、たんなる引用史といっておきながら、方法論など学問の根底にかかわるようなことをのべてしまった。いちどは一章をけずろうかともおもった。しかし、ワープロにうちこんだものをけす勇氣はなかった。小論では、先行研究のこまかいまちがいをずいぶん指摘した。この小論にも、いろいろとまちがいはあるはずだ。専門家、諸先生方からのご指摘、ご教示をまちながら、小論を終えることとする。

謝辞

草稿の段階で井上章一日文研助教授と、山田仁史京大院生から、助言や不適切な表現の指摘をうけた。名をあげて感謝の意を表しておく。

参考文献

- 秋本吉徳（一九八二）『風土記の神話―梗概と問題点』、稲岡耕二編『別冊国文学 日本神話必携』学燈社。一五七―一七一頁。
- 秋本吉徳（一九九五）『中央と地方との関係―地誌』、『岩波講座日本文学史第一巻・文学の誕生から八世紀まで』一七五―一九八頁。
- 秋本吉郎（一九三四）『風土記の研究史』、『国語と国文学』一一―四四一〇―四三三。
- 秋本吉郎校注（一九五八）『日本古典文学大系 風土記』岩波書店。
- 秋本吉郎（一九六三）『風土記の研究』ミネルヴァ書房。
- 浅田芳朗（一九七五）『播磨国風土記』、上田正昭編『風土記』社会思想社。一五五―一八四頁。
- 浅田芳朗（一九八二）『図説播磨国風土記への招待』柏書房。
- 阿部猛（一九七四）『鉄の古代史―吉野裕と福士幸次郎の仕事―』、『日本歴史』三〇八・四〇―五〇頁。
- 阿部正路（一九七四）『中山太郎』、『伝統と現代』二五・九八―一〇四。
- 鑄方貞亮（一九四三）『本邦古代肥料考―人糞尿肥料の問題―』、『経済史研究』二九・四・六七―八三。
- 鑄方貞亮（一九四五）『日本古代家畜史』河出書房。
- 鑄方貞亮（一九四八）『古代前期の産業経済』、『新日本史講座「古代前期」』中央公論社。
- 鑄方貞亮（一九五七）『農業』、『図説日本文化史大系2 飛鳥時代』小学館。一四二―一五二頁。
- 井口樹生（一九九二）『境界芸文伝承研究』三弥井書店。
- 池田三枝子（一九九七）『サヨツヒメ説話』、『日本神話事典』大和書房。

一五五―一五六頁。

石川純一郎（一九八〇）『天竜川』静岡新聞社。

石川純一郎（一九八二）「山岳斜面集落の農耕文化複合―参信遠地方のシシマツリを中心に―」、『國學院雜誌』八三・十一・二四六―二六三。

石川純一郎（一九八三）「狩人の生活と伝承」、大林太良他編『日本民俗文化大系五 山民と海人Ⅱ非平地民の生活と伝承Ⅱ』講談社。一四〇―一七二頁。

石川純一郎（一九九二）「中世・近世における狩座と狩獵信仰」、小山修三編『狩獵と漁労 日本文化の源流をさぐる』雄山閣。二二六―二五四頁。

市古宙二責任編集（一九九〇）『増訂版 日本文学全史一 上代』学燈社。

伊藤幹治（一九六六）「農業と日本神話」、「歴史教育」一四・四・一六―二二。

井上通泰校訂（一九二六）『播磨風土記』、与謝野寛・正宗敦夫・与謝

野晶子編『日本古典全集 古風土記集 下巻』日本古典全集刊行会。

井上通泰（一九三二）『播磨風土記新考』大岡山書店。

井上光貞（一九八四）『日本古代の祭祀と王権』東京大学出版会。

植垣節也（一九七二）『風土記の研究並びに漢字索引』風間書房。

植垣節也校注（一九九七）『新編日本古典文学全集五 風土記』小学館。

植木直一郎校訂（一九三五）『風土記集』大日本文庫刊行会。

上田正昭（一九九三）「殺牛馬信仰の考察」、松前健教授古稀記念…

神々の祭祀と伝承』同朋舎。一九―三四頁。

宇野円空（一九四二）『マライシアに於ける稻米儀礼』東洋文庫。

宇野円空（一九四四）『マライシアに於ける稻米儀礼』日光書院。

大林太良（一九六七）「民族学から見た日本人」、蒲生正男・大林太良・村武精一編『文化人類学』角川書店。一三四―一四二頁。

大林太良（一九七三a）『稲作の神話』弘文堂。

大林太良（一九七三b）「中山太郎論」、季刊柳田国男研究」二・六〇―一七二。

大林太良（一九七七）「日本文化の五つの源流―日本民族起源論と岡正雄学説」、『歴史と人物』七・六・一五八―一六七。

大林太良（一九八三）「海と山に生きる人々―その生態・生業と文化―」、大林太良編『日本民俗文化大系第五巻 山民と海人』小学館。

五一―六四頁。

大林太良（一九九〇）『東と西 海と山―日本の文化領域』小学館。

大林太良・吉田敦彦監修（一九九七）『日本神話事典』大和書房。

大日方克己（一九九三）『古代国家と年中行事』吉川弘文館。

岡茂雄（一九七四）『本屋風情』平凡社。

岡正雄（一九五八）「日本文化の基礎構造」、『日本民俗学大系第二巻』

平凡社。五一―二頁。

岡正雄（一九七九）『異人その他』言叢社。

岡正雄（一九九五）『異人その他』岩波文庫。

岡田精司（一九八八）「古代伝承の鹿―大王祭祀復元の試み―」、直木孝次郎先生古稀記念会『古代史論集 上』塙書房。一二五―一五一頁。

岡田精司・西宮一民（一九七七）「風土記 本文鑑賞」、直木孝次郎・

西宮一民・岡田精司編『鑑賞日本古典文学第二巻 日本書紀・風土記』角川書店。二九一―四〇八頁。

長田俊樹（一九九五a）『ムンダ人の農耕文化と食事文化・民族言語学的考察―インド文化・稲作文化・照葉樹林文化―』国際日本文化研究センター。

長田俊樹（一九九五b）『ムンダ人の稲魂観念について―インド稲作異質論をめぐって―』、『稲作技術と文化』一八・五一―七四。

長田俊樹（一九九七）『第三回オーストラリア言語学講習会とオーストラリア言語学界管見』、『東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所通信』九〇・二四―三三。

小野重朗（一九六四）『南九州の柴祭と打植祭の研究』。私家版。小野（一九七〇）第二章参照。

小野重朗（一九七〇）『農耕儀礼の研究』弘文堂。

小野武夫（一九四二）『日本農業起源論』日本評論社。

小山田宏一（一九九七）『土器絵画と銅鐸絵画の比較』、広瀬和雄編『縄紋から弥生への新歴史像』角川書店。二七七―二七九頁。

折口信夫（一九一九）一九六六『万葉集辞典』、『折口信夫全集第六巻』中央公論社。

折口信夫（一九三〇）一九七二『花祭後篇 跋―一つの解説』、『早川孝太郎全集第二巻』五〇一―五三八頁。

折口信夫（一九三二）一九六六『風土記の古代生活』、『折口信夫全集第八巻』中央公論社。一七五―二一六頁。

折口信夫（一九三五）『上世日本文学史』、『国語国文学講座 第十五巻』雄山閣。

折口信夫（一九七〇a）『折口信夫全集ノート編第二巻』中央公論社。

折口信夫（一九七〇b）『折口信夫全集ノート編第十巻』中央公論社。

加藤九祚（一九七六）『天の蛇 ニコライ・ネフスキーの生涯』河出書房新社。

加藤守雄（一九六七）『わが師・折口信夫』文藝春秋社。

金関恕（一九八六）『呪術と祭』、『岩波講座日本考古学四 集落と祭祀』岩波書店。二六九―三〇六頁。

亀井輝一郎（一九七七）『参考文献』、直木孝次郎・西宮一民・岡田精司編『鑑賞日本古典文学第二巻 日本書紀・風土記』角川書店。五〇―五二九頁。

亀井孝・河野六郎・千野栄一編（一九八六―一九九五）『言語学大事典』全六巻。三省堂。

川添登（一九六〇）一九七九『民と神のすまい』講談社学術文庫。

神田典城（一九九二）『日本神話論考 出雲神話篇』笠間書院。

木村靖二（一九三二a）『原始社会の経済生活と農業』、『経済史研究』八一・二二八―四五。

木村靖二（一九三二b）『原始日本生産史論』白揚社。

木村靖二（一九四八）『古代農村社会経済史』

木村靖二（一九六三）『原始の農耕文化』日本農業新聞。

木村靖二（一九六七）『原始の農耕文化 増補版』日本農業新聞。

金田一京助（一九五八）『中山太郎翁のこと』、『日本民俗学大系第三巻』平凡社。三四三―三四四頁。

倉塚睦子（一九六二）『女神に関する覚書―播磨風土記の世界―』、『都大論究』二・一一―一八。

倉野憲司 (一九二九) 「播磨風土記の研究」、『古代文学研究』岡村書店。

一一七四頁。

倉野憲司 (一九三三) 「風土記研究」、『上代日本文学講座第四卷』八五

一一九頁。

倉野憲司訳 (一九六六) 「風土記」、『古典日本文学全集一 古事記・風

土記・日本霊異記・古代歌謡』筑摩書房。一〇七—一五〇頁。

栗田寛注訳 (二八九九) 「標註古風土記」大日本図書。

栗原朋信 (一九七八) 「犠牲礼についての一考察」、『上代日本対外関係の研究』吉川弘文館。

古事記学会編 (一九八六) 『古事記研究文献目録 雑誌論文篇』国書刊行会。

古事記学会編 (一九九二) 『古事記研究文献目録 単行書篇』国書刊行会。

小林行雄 (二九五九) 『古墳の話』岩波新書。

小松和彦 (一九七七) 「日本神話における占有儀礼」、『講座日本の神話

七 日本神話と祭祀』有精堂。一一七—一四〇頁。

佐伯有清 (一九六七) 『牛と古代人の生活—近代につながる牛殺しの習

俗—』至文堂。

佐久間惇一 (一九八五) 『狩猟の民俗』岩崎美術社。

桜井徳太郎 (一九六二—一九八八) 「講義団成立過程の研究」、『桜井

徳太郎著作集第一卷』吉川弘文館。

桜井秀雄 (一九九二) 「殺牛馬信仰に関する文献史料の再検討」、『信

濃』四四—四六〇—七七八。

笹生衛 (一九八四) 「古代動物供犠とその背景」、『神道宗教』一一四—

七七一—九七。

佐々木高明 (一九七二) 『稲作以前』NHKブックス。

佐々木高明 (一九八二) 『照葉樹林文化への道』NHKブックス。

佐々木高明 (一九八五) 「狩り・死と生のおりなす非日常の世界—焼畑

農耕民社会における狩猟の象徴的意味」、石川栄吉・岩田慶治・佐々

木高明編『生と死の人類学』講談社。二二七—二五一頁。

佐佐木信綱 (一九三五) 『上代文学史 上巻』東京堂。

佐原眞 (一九七三) 「銅鐸の絵物語—土と石の文学」、『国文学』一八一—三四五—五三。

佐原眞・春成秀爾 (一九九七) 「対論・銅鐸の絵をどう読み解くか」、国立歴史民俗博物館編『歴博フォーラム銅鐸の絵を読み解く』小学

館。一三一—一八二頁。

椎野若菜 (一九九五) 「古代日本の供犠に関する一考察」、佐伯有清先

生古稀記念会編『日本古代の祭祀と仏教』吉川弘文館。四一—九二頁。

下出積与 (一九七二) 『日本古代の神祇と道教』吉川弘文館。

白石昭臣 (一九八八) 『畑作の民俗』雄山閣。

杉山晃一 (一九六〇) 「三農耕儀礼 A米」、泉靖一・中根千枝編『現

代文化人類学第三卷 人間の社会II』中山書店。二三〇—二六七頁。

鈴木重胤著・秋野庸彦校訂 (一九二二) 『日本書紀伝 六』國學院大學

皇典講究所発行図書販売所。

鈴木英夫 (一九八八) 『稲の道・歌の道—雲南に歌垣のルーツをもとめ

て—』本阿弥書店。

住谷一彦 (一九七九) 「岡正雄『古日本の文化層』—或る素描—」、岡

正雄『異人その他』言叢社。四三二―四五二頁。

瀧音能之(一九九二)『風土記の呪的世界』、『月刊歴史手帖』一九一九
・四一九。

瀧音能之(一九九二)『風土記説話の古代史』桜楓社。

高橋俊彦(一九四二)『神話の風土現象―播磨風土記の神話―』、『文
学』一〇一・八一二。

高橋六二(一九九三)『農耕と自然』、古橋信孝・三浦佑之・森朝男編

『古代文学講座二 自然と技術』勉誠社。八五―九九頁。

武田祐吉編(一九三七)『風土記』岩波文庫。

武田祐吉(一九四〇―一九四二)一九七三『風土記』、『武田祐吉著
作集第四卷 古事記・風土記篇』角川書店。二九一―三三三頁。

武田祐吉(一九四二)『神・人・自然』八雲書林。

武田祐吉編(一九五七)『日本古典鑑賞講座 古事記・風土記・記紀歌
謡』角川書店。

竹村卓二(一九七九)『山の神―種族文化との比較から』、松前健編
『講座日本の古代信仰二 神々の誕生』学生社。一一〇―一三七頁。

辰巳和弘(一九九六)『弥生絵画と神話の世界』、香芝市二上山博物館
編『弥生人の鳥獣戯画』雄山閣。二二―四一頁。

田中真吾・松下まり子(一九九四)『風土記時代の自然環境』、櫃本誠
一編『風土記の考古学2 播磨国風土記の巻』同成社。二五―六八
頁。

田中卓校注(一九九四)『神道大系 古典編七 風土記』神道大系編纂
会。

谷川健一(一九七五)一九八〇『神・人間・動物』、『谷川健一著作

集第一卷』三一書房。一八一―三六一頁。

千葉徳爾(一九六三)『日向東米良の狩獵伝承』、『日本民俗学会報』三
〇・二〇―二五。

千葉徳爾(一九六九)『狩獵伝承研究』風間書房。

千葉徳爾(一九七二)『続狩獵伝承研究』風間書房。

千葉徳爾(一九七四)『早川さんと狩獵伝承』、『早川孝太郎全集第四
巻』未來社。五〇五―五二四頁。

千葉徳爾(一九七五)『狩獵伝承』法政大学出版局。

千葉徳爾(一九七七)『狩獵伝承研究 後篇』風間書房。

千葉徳爾(一九八六)『狩獵伝承研究 総括編』風間書房。

千葉徳爾(一九九〇)『狩獵伝承研究 補遺篇』風間書房。

千葉徳爾(一九九二)『日本の狩獵者とその行動―とくに農耕とのかか
わりについて―』、小山修三編『狩獵と漁獵 日本文化の源流をさぐ
る』雄山閣。二四〇―二五四頁。

千葉徳爾(一九九七)『狩獵伝承研究 再考篇』風間書房。

塚本哲三編(一九一八)『古事記 全・祝詞 全・風土記 全』友朋堂。

土橋寛(一九六八)『古代歌謡の世界』塙書房。

土肥孝(一九八四)『日本古代における犠牲馬』、『文化財論叢』同朋舎。

鳥越憲三郎(一九八五)『倭族から日本人へ』弘文堂。

鳥越憲三郎(一九九五)『稲作儀礼と首狩り』雄山閣。

ナウマン、ネリー、野村伸一・檜枝陽一郎訳(一九九四)『山の神』言
叢社。[1963, 1964] Yama no kami-die japanische Berggotttheit,

Asian Folklore Studies 22: 133-366, 23-2: 48-199)

直木孝次郎・西宮一民・岡田精司編(一九七七)『鑑賞日本古典文学第

二巻 日本書紀・風土記 角川書店。

中尾佐助 (一九六六) 『栽培植物の起源』 岩波新書。

中島河太郎 (一九八五) 「中山太郎伝」、『和洋女子大学学部創設三十五周年記念論文集』一〇七―一二四頁。

中西進編 (一九九〇) 『日本文学新史〈古代Ⅰ〉』 至文堂。

中村慎一 (一九九九) 「農業の祭り」、金関恕・佐原眞編『古代史の論点5 神と祭り』小学館。八五―一二〇頁。

中山太郎 (一九二〇) 一九七七 「砂撒き」、『日本民俗学②』 大和書房。三三―五五頁。

中山太郎 (駒込林二) (一九二五) 一九七七 「動物を犠牲にする土俗(―動物犠牲考)」、『日本民俗学①』 大和書房。二七三―二九六頁。

中山太郎 (一九二六) 『日本民俗志』 総葉社書店。

中山太郎 (一九二九) 「風土記の考察」、『神道講座』 原書房。

中山太郎 (一九三〇) 『日本巫女史』 大岡山書店。

中山太郎 (一九四二) 『戦争と生活の歴史』 弘学社。

中山太郎 (一九四三) 『信仰と民俗』 三笠書房。

中山泰昌編 (一九二七) 『校註日本文学大系 古事記・風土記・祝詞・壽詞・宣命・高橋氏文・日本書紀神代卷』 誠文堂。

西宮一民校注 (一九八五) 『古語拾遺』 岩波文庫。

西宮紘 (一九九三) 『鬼神の世紀』 工作舎。

西本豊弘 (一九九一a) 「縄文時代のシカ・イノシシ狩猟」、『古代』 九一・一一四―一三二。

西本豊弘 (一九九一b) 「弥生時代のブタ」、『国立歴史民俗博物館研究報告』 三六・一七五―一八九。

西本豊弘 (一九九五) 「縄文人と弥生人の動物観」、『国立歴史民俗博物館研究報告』 六一・七三―八六。

ネフスキー、ニコライ (一九一八) 一九七二 「農業に関する血液の土俗」、岡正雄編『月と不死』 東洋文庫。平凡社。二〇―二五頁。

野口隆 (一九九二) 「古代日本の思考様式 記紀風土記の神話社会学的研究」 葦書房。

野本寛一 (一九八四) 『焼畑民俗文化論』 雄山閣。

野本寛一 (一九八七) 『生態民俗学序説』 白水社。

野本寛一 (一九九五) 「日本人の動物観の変遷―鹿をめぐる葛藤」、河合雅雄・埴原和郎編『講座文明と環境第八巻 動物と文明』 朝倉書店。一一九―一三四。

野本寛一 (一九九六) 「民俗からみた弥生絵画」、香芝市二上山博物館編『弥生人の鳥獣戯画』 雄山閣。四二―六一頁。

萩原秀三郎 (一九八七) 『稲を伝えた民族―苗族と江南の民族文化』 雄山閣。

橋浦泰雄 (一九七三) 「インタビュ―柳田国男との出会い」、『柳田国男研究』 二・九八―一二六。

橋本裕行 (一九八七) 「弥生土器の絵」、『季刊考古学』 一九・六五―六九。

橋本裕行 (一九八九) 「弥生時代の絵物語」、工業普通編『古代史復元5 弥生人の造形』 講談社。

橋本裕行 (一九九四) 「弥生絵画に内在する象徴性について」、『日本美術全集一 原始の造形』 講談社。一六八―一七五頁。

浜田泰子 (一九九二) 「南島の動物供犠……境界祭祀シマクサランを中

心に、赤坂憲雄編『叢書史層を掘るIV 供犠の深層へ』新曜社。二五一―二四八頁。

早川孝太郎(一九二七a)一九八八「歛柄祭と初午の種取り」、『早川孝太郎全集第十巻 食と儀礼伝承』未來社。四五七―四五九頁。

早川孝太郎(一九二七b)一九七四「参遠山村手記」、『早川孝太郎全集第四巻 山村の民俗と動物』未來社。三三三―三五三頁。

早川孝太郎(一九三〇)一九七二「花祭後篇」、『早川孝太郎全集第二巻 民俗芸能』未來社。一―五三八頁。

早川孝太郎(一九四二a)一九八二「農と祭」、『早川孝太郎全集第八巻 案山子のことから』未來社。一三一―一九八頁。

早川孝太郎(一九四二b)一九七三「農と能」、『早川孝太郎全集第三巻 芸能と口承文芸』未來社。九四―一二二頁。

原田信男(一九九三)『歴史のなかの米と肉』平凡社。

春成秀爾(一九九二)「角のない鹿―弥生時代の農耕儀礼―」、高倉洋彰編『横山浩一先生退官記念論文集II 日本における初期弥生文化の成立』横山浩一退官記念事業会。四四二―四八一頁。

春成秀爾(一九九三)「豚の下顎骨懸架―弥生時代における僻邪の習俗―」、『国立歴史民俗博物館研究報告』五〇:七二―一四〇。

檜枝陽一郎(一九九四)「焼畑文化論再考―『山の神』の評価をめぐる、ネリー・ナウマン、檜枝・野村訳『山の神』言叢社。四三八―四六二頁。

肥後和男(一九四三)『風土記抄』。弘文堂。

久松潜一校註(一九六〇)『風土記 上』朝日新聞社。

榎本誠一編(一九九四)『風土記の考古学―播磨国風土記の巻』同成

社。

平林章仁(一九八八)「描かれた鹿―鹿は何を表彰したか―」、『龍谷史談』九一:一八―三九。

古橋信孝編(一九八六)『日本文芸史第一巻 古代I』河出書房新社。
フレイザー、ジェイムズ・G。折島正司・黒瀬恭子訳(一九八六)『王権の呪術的起源』思索社。

益田勝実(一九七七)「日本神話における外在と内在―日本神話論における始原と展開」、『国文学解釈と鑑賞』四二:一〇:六一―一五。

増田精一(一九七七)「埴輪と神話」、『国文学解釈と鑑賞』四二:一〇:九六―一〇四。

松井章(一九九五)「古代・中世の村落における動物祭祀」、『国立歴史民俗博物館研究報告』六一:五五―六九。

松岡静雄(一九二七)『播磨風土記物語』刀江書院。

松村武雄(一九四七)「民族学上より見たる播磨風土記―上代農耕民の生活を中心として―」、『民族学研究』二二:四:一一―二三。

松村武雄(一九五八)『日本神話の研究第四巻―総合研究篇―』培風館。
松本信広(一九五九)「稲作の問題」、『日本民俗学大系二巻』平凡社。一九一―二〇七頁。

三浦佑之(一九九二)「イケニへ譚の発生……縄文と弥生のはざまに」、赤坂憲雄編『叢書史層を掘るIV 供犠の深層へ』新曜社。一〇三―一三八頁。

三谷栄一(一九六〇)『日本文学の民俗学的研究』有精堂。

宮崎市定(一九七九)『史記を語る』岩波新書。

村崎真智子(一九九三)『阿蘇神社祭祀の研究』法政大学出版局。

- 守屋俊彦（一九七九）『地方の神々』、土橋寛編『講座日本の古代信仰四 呪と文学』学生社。一〇八一—一三〇頁。
- 柳田国男（一九四二）一九六九『日本の祭』、『定本柳田国男集第十卷』筑摩書房。一五三—一三四頁。
- 柳田国男（一九五八）一九七二『故郷七〇年』、『定本柳田国男集別巻第三』筑摩書房。一—四二頁。
- 山上伊豆母（一九六九）『神話の原像』岩崎美術社。
- 山下欣一（一九八二）『南島の動物供儀—文化人類学的視点から—』、『國學院雜誌』八三—一〇二、一一二—一二四。
- 山田隆治（一九六九）『ムンダ族の農耕文化複合』風間書房。
- 横田健一（一九五二）『風土記における国の觀念』、『日本史論集 古代社会と宗教』若竹書店。七一—一三〇頁。
- 横田健一（一九五六）『文化人類学序説』三和書房。
- 横田健一（一九六九）『日本古代の精神—神々の發展と没落—』講談社新書。
- 横田健一（一九七七）『あとがき』、横田健一編『日本書紀研究第十冊』塙書房。三三五—三三九頁。
- 横田健一（一九九〇）『神話の構造』木耳社。
- 横田健一編（一九六九）『ザ・マンギャン—関西大学第二次ミンドロ島学術探検隊報告書—』関西大学文化会探検会。
- 義江明子（一九九五）『殺牛祭神と魚酒—性別分業と経営の観点より—』、佐伯有清先生古稀記念会編『日本古代の祭祀と仏教』吉川弘文館。一—三九頁。
- 吉田敦彦（一九七六a）『日本神話の源流』講談社新書。
- 吉田敦彦（一九七六b）『小さき子とハイヌウェレ』みすず書房。
- 吉田敦彦（一九八九）『日本神話における稲作と焼畑』、君島久子編『東アジアの創世神話』弘文堂。一六八—一九一頁。
- 吉田敦彦（一九九二）『日本神話の構造—神話の起源として区別される三層—』、佐々木高明・大林太良編『日本文化の源流—北からの道—南からの道—』小学館。一七三—二一四頁。
- 吉野裕（一九五九）『風土記の世界』、岩波講座 日本文学史 第三巻 古代。岩波書店。
- 吉野裕訳（一九六九a）『風土記』東洋文庫。平凡社。
- 吉野裕（一九六九b）『驚になった蛤の話（上）—大穴牟遲伝承批判—』、『文学』三七—四〇、三七—四八。
- 吉野裕（一九六九c）『驚になった蛤の話（下）—大穴牟遲伝承批判—』、『文学』三七—五〇、八〇—九一。
- 吉野裕（一九六九d）『古代豪族の鎮魂のために—続大穴牟遲伝承批判—』、『文学』三七—七〇、一一—一六。
- 吉野裕（一九六九e）『ヘクランに坐す神々の話（上）—産鉄族伝承批判—』、『文学』三七—一〇一、三〇—四五。
- 吉野裕（一九六九f）『ヘクランに坐す神々の話（下）—産鉄族伝承批判—』、『文学』三七—一二二、四九—六二。
- 吉野裕（一九七〇）『小碓命の物語』、『文学』三八—六〇、一一—一六。
- 吉野裕（一九七二）『へ鹿の血』の秘密—讃容郡比売伝承批判』、『文学』三九—二二七、五—八九。
- 吉野裕（一九七二）『風土記世界と鉄王神話』三一書房。
- ランゲンドン、T・D. 今井邦彦訳注（一九七二）『英語変形文法の要

点』大修館書店。

渡辺昭五(一九八二)『歌垣の研究』三弥井書店。

英文参考文献

- Bellwood, Peter (1994) 'An archaeologist's view of language macrofamily relationships', *Oceanic Linguistics* 33: 391-406.
- Bellwood, P., J. J. Fox and D. Tryon (eds) (1995) *The Austronesians: Historical and Comparative Perspectives*. The Australian National University, Canberra.
- Blust, Robert (1995) 'The prehistory of the Austronesian-speaking peoples: A view from language', *Journal of World Prehistory* 9: 453-510.
- Blust, Robert (1996) 'Beyond the Austronesian homeland: The Austric hypothesis and its implications for archaeology', *Transactions of the American Philosophical Society*.
- de Josselin de Jong, P. E. (1965) 'An interpretation of agricultural rites in Southeast Asia, with a demonstration of use of data from both continental and insular areas', *Journal of Asian Studies* 15: 283-291.
- Dutton, Tom and Darrell Tryon (eds) (1994) *Language Contact and Change in the Austronesian World*. Mouton de Gruyter, Berlin.
- Fox, J. J. and C. Sather(eds) (1996) *Origins, Ancestry and Alliance: Explorations in Austronesian Ethnography*. The Australian National University, Canberra.
- Koerner, E. Komrad (1983) 'The "Chomskyan revolution" and its historiography: A few critical remarks', *Language and Communication* 3: 147-169.
- Langendoen, Terrence (1967a) 'The copula in Mundari', J. W. M. Verhaar (ed) *The Verb "be" and Its Synonyms*. 75-100. Dordrecht.
- Langendoen, Terrence (1967b) 'Mundari verb conjugation', *Linguistics* 32: 39-57.
- Newmeyer, Frederick J. (1986) 'Has there been a "Chomskyan revolution" in linguistics', *Language* 62-1: 1-18.
- Pawley, Andrew K. and M.D. Ross (eds) (1994) *Austronesian Terminologies: Continuity and Change*. Pacific Linguistics C-127, Australian National University.
- Rahmann, Rudolf (1952) 'The ritual spring hunt in northeastern and middle India', *Anthropos* 47: 871-890.
- Tryon, Darrell (ed) (1995) *The Comparative Austronesian Dictionary*. Vols. 1-4. Mouton de Gruyter, Berlin.